

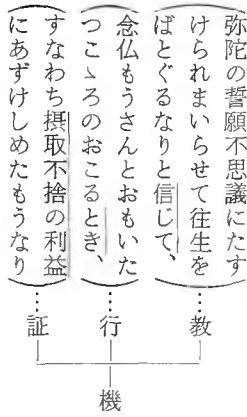
# 機 (二)

## 大 城 邦 義

さきに私は『歎異抄』第一条の冒頭の言葉、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり、

という一段に「機」の成就の相を頷き、そこに「教」「行」「証」が具備円満していることを見た。



すなわち、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて」と言い切る、その「信」の自覚内容に「教」の事実を見、「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」という、その「信」の「一念」の発起に「大行」の事実を見、その「一念」に「すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもう」という「証」を見たのである。その「教」「行」「証」の三法を具備円満せるものが本願の「機」の現実態であるということである。実に、「顕浄土真実教行証文類」という、その「浄土真実教行証」とは、まさに「浄土真実の機」（本願の機）の内面を開いたものである。「教・行・証」の三法は「機」すなわち「成就信」にある。「成就信」の内に「教・行・証」の三法は実働しているのである。何故ならその「信」は「聞」より生れ、「聞」においてあるからである。

前号では「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」の一句に引かれて「行(信)」について領解を述べた。すなわち「念仏」は「とき」にあると気づき、故にその「とき」はいかなる内実をもっているかを確認しなかったのである。そこで明らかになったことは、その「とき」は「聞」においてある「阿弥陀」の「とき」であり、それは衆生に「即」の世界を開き、過去↓現在↓未来と流れゆく時空感覚を廻転して「(去・来)↓現」という領きをもたらず「阿弥陀」の名告りであった。「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」とは、「ときをへず、日をもへだてぬ」即時であり、「そのくらい(正定聚位)にさだまりつく」即得往生の意義をもつものであった。「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」という「行信の一念」に「すなわち撰取不捨の利益にあずかる」という「証」が現働していると述べたことである。「即」——それも「自然」なるところに「阿弥陀」の名告りがある。「憶念弥陀仏本願、自然、即時入必定」と言われることである。

「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」、それは本願成就のときであり、そこに、

十方恒沙諸仏如来皆共讚歎無量寿仏威神功德不可思

議、諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼国即得往生住不退転(大無量寿經・下)

という領きが脈々と流れているのであるが、この領きが「名号六字釈」の母胎であった。故に「南無阿弥陀仏」において転入の仏事があり、「至心廻向」の一句が「至心廻向」と領受されるとき、そこに本願の宗教の独立現前があると述べたのである。「至心廻向」の一句が「至心廻向」と領受されるとき——それはただ「聞」においてあるのであり、「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」はつねに「たすけんとおぼしめしたちける本願」を聞く今現在にあるのである。その今現在の生をたまわるのが「阿弥陀」の名告りにおいて生きる「ただ念仏して」という決定においてなのである。

以下、更に「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」という一点を憶念しつつ、「本願」の機の内実を見開いてゆきたい。

一一

「阿弥陀」は名告る。名告りにおいて「阿弥陀」は在る。そこに人は「ただ念仏して弥陀にたすけられる」という宗教的生を成就する。それは、「阿弥陀」において

ある時をたまわり「阿弥陀」を場として生きてある事実をたまわるのである。「弥陀をたのめば南無阿弥陀仏の主となる」・「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」(蓮如)とは、実に「阿弥陀」において「時」と「場」に目ざめることをいうのである。

「阿弥陀」の「時」、それは阿弥陀が南無阿弥陀仏として衆生の真只中に成就する「南無」である。それが同時に「場」である。阿弥陀においては「時」即ち「場」である。「南無」は阿弥陀の時であり場なのである。「阿弥陀」は「南無」の一点に「時」即「場」として表現している。故に衆生はその「南無」の一点において「阿弥陀」に出遇う、すなわち「今・現在」に落在するのである。「南無」の一点に如来と衆生との出遇いがある。阿弥陀が「南無」を成就するときは、衆生が「南無」に自己を發見するときである。すなわち衆生自身が「南無」となる、「南無」の名告りを自己とするのである。故に「南無」とは衆生がその本来性として持っている如来性に目ざめることなのである。「南無」において「阿弥陀」を信る。「阿弥陀」を信ることは衆生自身に「時」と「場」が「時」即「場」として開かれることである。それは「無量寿」を現前一念に生きるが故に「無量光」におい

てある「自身」に気づくことである。「無量寿」の現前一念を生きることが「無量光」において「自身」を生きることである。それが「南無」の一点に成就する生である。

「阿弥陀」は端的に「南無」を成就し、衆生に「南無」を開いて、衆生はその「南無」を「南無」として落在するのである。「南無」は「時」即「場」として衆生に「如」の世界を開くのである。

その「南無」の成就現行態を「稱無碍光如来名」の一点に見、「諸仏稱名之願淨土真実之行」の仏事を語っているのが「行巻」である。「稱名」の一事実に「南無」の仏事があるのである。その「稱名」とは「名号を稱すること下至十声聞等に及ぶまで」(行巻、原漢文)と言われ、るものであることはいままでもない。衆生はその「稱名」の一点において「南無」に触れるのである。

「南無」が現成する一点を「稱名」に見、一切衆生を「諸仏」と成す、それが第十七願・大悲の願である。第十七願が「往相廻向の願」(行巻)と言われるゆえんである。「往相正業の願」(淨土文類聚鈔)とも言われている。

第十七願は「稱名」の仏事を開き、ただ一切衆生に「稱名」を「行」として開き、そこに「南無」を成就せしめ

るのである。

そのとき「諸仏称名」は重構造をもっていることに気づく。すなわち、第十七願・諸仏称名の願は「設我得仏十方世界無量諸仏不悉咨嗟称我名者不取正覚」（大無量壽經・上）と誓われているのであるが、衆生はまず「十方世界の無量の諸仏」（諸仏善知識）が「称名」している仏事を聞き、その現実に触れて、自らも諸仏称名の世界に参加するのである。すなわち「諸仏称名」とは文字通り諸仏（善知識）が称名・称揚・咨嗟しているその事実をいうのであり、同時にその諸仏称名にふれて諸仏と成っていく十方無量の衆生をも意味しているのである。そのこととは本願成就文において明らかである。「十方恒沙諸仏如来皆共讚嘆無量壽仏威神功德不可思議、諸有衆生聞其名号」（大無量壽經・下）とある。かく、第十七願は無限に諸有衆生を諸仏となす、諸仏を産み出す根本原理の用きをなす選択本願なのである。第十七願のもつ重構造とは実に無限に諸仏を生み出す運動態であることを知る。第十七願は「大行」を成就しつづける願、「南無」という仏事を成就しつづける願なのである。この本願成就文を見ると、一切衆生に「南無」を成就するために開かれてある「行」が実に「聞其名号」と押えられていること

に気づく。実に「称名」とは「聞其名号」の謂なのである。「称名」の成就とは「聞其名号」の成就であり、それが「南無」の成就、「大行」の成就なのである。

かく第十七願は衆生と諸仏の世界を結ぶ唯一の願であり、故に衆生を諸仏と成す唯一の具体的道なのである。第十七願において「聞」が開示されており、それが次の第十八・十九・二十願の「欲生我国」を連動せしめていることである。第十七願成就の「南無」は第十八願成就の根源にある「至心廻向」の只中に用いている「欲生我国」を開くのである。第十七願成就をくぐることなく、第十八願成就はない、すなわち自身を信る道はないのである。第十七願成就とはすなわち教言との出会いである。衆生は法に直ちに触れるのではない。教えにおいて触れるのである。かの「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」（散善義・原漢文）との声を聞いた善導大師が「仁者但決定して此道を尋ねて行け、必ず死の難無けん、若し住らば即ち死せん」（同上）との「東岸」の声（教法）との出会いにおいて「四・五寸」の「白道」上の人と成った如くである。東岸上の声、すなわち第十七願成就である。そしてその第十七願成就において、白道上の人と成る、

それを善導は「衆生貧賤煩惱中能生清淨願往生心」と言い切った。第十七願は本願の初めであり、又終りを約するものである。

かく、第十七願は、第十八（十九・二十）願というものを開いていく一点なのであるが、同時に第十七願の只中には、つねに、「南無」の仏事を成就せしめんがために、第十二願・光明無量の願、第十三願・寿命無量の願が作働していることである。「南無」の一点において、光明無量・寿命無量の「如」の世界に目ざめると述べたことであるが、同時に、光明無量・寿命無量の願は「南無」の仏事成就を支えつづけている根本なのである。

「ただ念仏して」という生の只中に、基本的にかくの如く本願が展開しているのである。その出発点が第十七願にあることを身に沁みて思うことである。第十七願がまず「選択本願」と言われること、ゆえあるかなである。

## 二

ただ「南無（阿弥陀仏）」を成就せしめる、それが「本願」のすべてである。「南無（阿弥陀仏）」の成就は「在世・正法・像・末・法滅・濁悪の群萌齊しく悲引したもう」（化身土巻・原漢文）仏事の全現である。「行巻」は

その「南無（阿弥陀仏）」という仏事成就の伝承を語っているのである。今、その「名号六字釈」はその「南無（阿弥陀仏）」という仏事に遭遇した者の端的なる表現、領解である。故に、

南無と言うは即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿弥陀仏と言うは即ち是れ其の行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得（行巻・原漢文）

という領ぎで仏教は尽きるのである。しかし、ここから浄土真宗の教学は展開してくるのである。自身に成就した「南無（阿弥陀仏）」の一点を開いていく、内に掘り下げていくのである。『教行信証』全六巻にわたる本願論もそこから生れてくるのである。

今、「行巻」の親鸞自身の名号六字釈は、親鸞の領ぎの領ぎ、自己確認としての領ぎ返しである。領ぎはたしかに領ぎであり、文類の確かな意義もそこにあるのであるが、しかしその領ぎがただその領ぎのまま停滞することとは、即ち幻想観念である。凝固してしまつた領ぎには宗教生命はない。それは或いは領ぎの知識化であつたり、領ぎの心情化であつたりする。本来宗教における領ぎは「信」と言われる如く、知が領ぐのでも情が領ぐのでもない。存在が領ぐのである。身が領ぐのである。「自身

は現に是れ……」という如くである。親鸞は「信知」と言う。存在の領きは、存在が相似相統する如く、つねに業縁の中で新しく領かれてゆくものである。

いずれにしろ、宗教における領きは現実に晒らされる中でその真偽を問われ、必ず再確認をせまられるものであるが、その再確認において表現が必然するのである。又真の領きは表現せずにおれぬものであろう。「敬いて一切往生人等に白さく」(行巻・原漢文)と。

しかし、そのとき「表現」は決して単に「知」による組み立てであつたり、「情」に溺れた一人よがりであつたりするものではない。存在において領かれた宗教の真実にあつては、人間の知と情はその本位本分を知り、知と情はその本位本分を尽くすべく、「領き」を内に掘り下げ、促し、跡づけていくのである。それが内観道というものである。故に、宗教の真実への領きにおける「表現」は表白性をもち、同時にどこまでも言葉尽くし表現を尽くすというすがたをとって、そこに宗教の真実を開示していくのである。今、親鸞の「名号六字釈」を見るとそのことは明瞭である。

南無の言は帰命なり、帰の言は至なり、又帰説なり、  
説字悦音、又帰説なり、説字税の音、悦税二の音、告

なり、述なり、人の意を宣述なり、命言は業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり、是を以て帰命は本願招喚の勅命なり、(行巻・原漢文)

善導が「言南無者即是帰命」と領いたことを領いた親鸞は、「南無の言」に「帰命——本願招喚の勅命」ありと表現したのである。まさに「南無」の「言」に第十七願成就を見たのである。第十七願成就が「南無」にあると領いたのである。それは第十七願・諸仏称名の世界に出遇い、「南無」の「言」に出遇い、「南無」の「言」に「仁者但決定して此の道を尋ねて行け」という「東岸に忽に人の勧むる声」を聞き、同時に「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」という「西岸上」からの招喚を聞いたのである。

故に「南無の言は帰命なり」とは、「南無」という文字が「帰命」という意味であると単に解釈しているのではない。まさしく「称名」の事実において「南無の言」が聞えたということである。「称名」において「南無」が「言」として聞えているのである。それは、「南無」は「言」にあるということである、否、「南無」は「言」であるということである。「言」とは文字ではない、存

在と一枚なるものである。故に「南無」の「言」に存在の救いはある。その「南無」の「言」を開くのが「称名」の事実なのである。すなわち「称名」の事実に「南無」があるということである。故に「称名」の世界が救いなのである。「称名」——それは、ここ、この身の現前一念に「帰命」という仏事を發起せしめる。否、「帰命」の發起がすなわち「称名」である。故に「称名」の事実に「本願」の声がある。

#### 四

帰命——本願招喚の勅命を聞く、そのとき、実は第十八願・念仏往生の願「設我得仏十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法」（大無量壽經・上）を聞くのであり、その「至心・信樂・欲生我國」を「本願の三心」として聞きとるのである。そのとき、「欲生」が根本で「至心信樂は欲生に始まる」（曾我暲深）と頷かざるをえないことは、まさに「欲生と言うは則ち是れ如来諸有の群生を招喚したもうの勅命なり」（信巻・原漢文）とあるとおりである。はじめに「勅命」あり。第十七願成就、「称名」において「南無の言」を聞き、「本願招喚の勅命」を聞く、そのときその「招喚の勅命」（声）

は「欲生我國」（我國に生れんと欲え）と聞えるのである。第十七願成就の「南無」の只中に「本願招喚の勅命」を聞くことは、第十八願成就の根源にある「至心廻向」の只中に「欲生我國」即ち「如来、諸有の群生を招喚したもうの勅命」を聞くことなのである。それはまさに「本願」に願われつづけてある自身、「本願」に呼ばれ待たれてある自身への直下の領きである。すなわち「深信自身」である。

以上のことは、言い換えれば、「本願」を聞くことのない「南無」はありえないということである。「願心」を聞くことのできない「南無」（帰命）などありえない、願われてある自身に気づくことのない「南無」などありえない、「深信自身」でない「南無」などありえない、もしあるとすれば、それは一体何なのか、自我心の要求の妄容態にすぎないではないか、ということである。

かくして「行巻」が端的に主題にし明らかにしている「称名」——「南無（阿弥陀仏）」の成就現行という一事は、決して衆生の起こす「南無（帰命）」ではなく、まさしく衆生に起こる、唯一の如来行なのである。「大行」とは実に如来行の謂なのである。そのとき衆生はただ如来が行ずる唯一の「場」としてあるのである。その場とは

即ち「宿業」のことである。如来は衆生（宿業）を場として「南無」を成就する。すなわち如来は衆生（宿業）を場としてしか「南無」を成就できないのである。それが「設い我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟して我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（大無量壽經・上・原漢文）という誓願の精神なのである。いわば如来は「十方衆生」を「十方世界の無量の諸仏」と呼びかけ、立てているのである。すなわち、如来は十方衆生に「南無」し、「南無」の一点を衆生に徹到せしめんと、「我が名を称せずんば正覚を取らじ」と誓っているのである。それが第十七願開示の「南無」の仏事の只中にある「発願廻向」のはたらきであり、

発願廻向と言うは如来已に発願して衆生の行を回施したもうの心なり、即是其行と言うは即ち選択本願是れなり、（行巻・原漢文）

といわれる「回施」の精神、「選択本願」なのである。

「南無」の只中にはたらく「本願招喚の勅命」、その根源には「如来已に発願して衆生の行を回施したもうの心」がある。その「心」こそ「即是其行」と言われる「選択本願」なのである。

「称名」——「浄土眞実の行」は「選択本願の行」と

して衆生に回施されている。「称名」はあくまで「衆生」においてある、「衆生の行」なのである。その意味で、第十七願はどこまでも「衆生」の「称名」が誓われているのであり、念仏者の誕生が誓われているのである。

「称名」の一点に「南無（阿弥陀仏）」の成就現行をかけたのである。「南無（阿弥陀仏）」を聞く、——衆生に「称名」が成就しなければ正覚を取らないというのである。そのため如来は「聞」の一事を衆生に開示しているのである。我々は「聞」において如来に出遇う、まさに「南無（阿弥陀仏）」に出遇うのである。第十七願・大悲の願心は、「称名」に托して我々に「聞」の一事を開示しているのである。故に「聞」の成就、それが「南無」の成就現行であり、「南無阿弥陀仏」の生の誕生なのである。「聞」に生きる、それが実は第十七願・諸仏称名の願成就の生、「南無」を自己とする生、すなわち、

必得往生と言うは不退の位に至ることを獲ることを彰すなり、経には即得と言へり、釈には必定と云へり、即の言は願力を聞くに由て報土の眞因決定する時剋の極速を光闡せるなり、必の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の良なり、（行巻・原漢文）

と言われる生なのである。第十七願によって「南無（阿



弥陀仏」が成就する、そこにまさに「絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾にこの現前の境遇に落在せる」(清沢満之) 自己が居る。それが「本願一乗海」より生れる「一乗海の機」である。

金剛の信心は絶対不二の機なり、知る可し。

(行巻・原漢文)

## 五

本願は第十七願に始まる。第十七願が開示せる「南無(阿弥陀仏)」に出遇い、「南無(阿弥陀仏)」に撰せられ、そして「南無(阿弥陀仏)」の名告りをもつ。それが本願の宗教の事実である。「はじめに行あり」(曾我量深)とは「はじめに第十七願あり」ということである。それはすなわち「はじめに僧伽あり」ということである。第十七願に出遇うことは「帰三宝」の成就、すなわち僧宝の成就だからである。親鸞にそくして言えば、「帰依仏」は「法然」との出遇い、「帰依法」は「本願」への帰入、「帰依僧」は「仏弟子」とされた自身である。それが第十七願、「南無(阿弥陀仏)」の成就現行において領かれる「帰三宝」の原点である。「帰依僧」の成就を仏弟子とされた「自身」とすることには問題がある。それは

重々承知している。ただ私は、「僧伽」とは自己自身がそれを外に見ているかがり、無いものであり、もしあるとしてもそれは僧伽ではなく単なる集団にすぎず、ただ「帰依仏・帰依法」を通して「帰依僧」が成就する、すなわち自己自身が仏法の世界に召され、仏弟子とされたとき、はじめて僧伽は現成する、そこから始まる、と領解しているのである。「南無」をたまわる、そこにおのずから「帰三宝」は成就しているのである。たまわりたる「南無」——仏教三千年の歴史はただ衆生むねわらに「南無」の一事を成就せしめんと流伝してきているのであった。

そして、第十七願成就の「南無(阿弥陀仏)」に出遇い、そこに三宝の成就を見、自身を原点として一切衆生の成仏道を見た者には、ただ自身がゆくりなくも仏弟子として召されたという謝念を内に深く深くたくわえつつ、宿業を大地として「教え」に応答しつづけていく生があるばかりである。そこには自身が仏弟子とされたという無上のよろこびがつねに「さるべき業縁」を生きる力の原点となっている。「仏弟子」になる、それは「ただ念仏して」という生をたまわることであり、それは人生がまさに成仏という一点に向っていると、方向が定まることなのである。人生の方向が定まる、それを現生不退とい

う。それはただ「南無」という仏事に遭遇、「南無(阿  
弥陀仏)」の名告りに遇う、第十七願成就に遇うところ  
にある。

七願成就の大功を証しするもの、それはただ自身が「南  
無阿弥陀仏」の僧伽に召されたということ、仏弟子とさ  
れたという一点にある。

そこに仏法の僧伽に召されたという事実がある。第十

(未完)

すべてお聖教は文字で書かれてあるが、文字に於て言葉を見出してゆくのが御開山聖人のお聖教を拝読される態度である。然るに我々はただ文字を文字として分別し、文字を自分の主観を以て見る。直々の言葉を聞くということになれば、その前には謹んで何らの思慮分別が消えて、ただ頭が下る。それを文字と見るから色んな理窟を捏ねる。聞其名号とは南無阿弥陀仏を文字にせず、仏のお言葉として生きたお言葉を聞く。南無阿弥陀仏は生きたお言葉である。本願とは、第十八願とはそのお言葉のいわれである。第十八願文はお言葉なれども結局第二義であるが南無阿弥陀仏は第一義である。このお言葉に接する時には、我々は何らの計いもなく、そのお言葉の中に盛ってある意味をいたたく、それが聞其名号である。お言葉を聞く、文字を読んではならぬ。

(曾我量深『歎異抄聴記』)